

富山医科薬科大学医学部看護学科早期体験実習 に対する学生の反応

塚田トキエ¹, 馬竹美穂², 落合 宏¹

¹富山医科薬科大学医学部看護学科

²富山医科薬科大学大学院医学研究科

要 約

富山医科薬科大学医学部看護学科早期体験実習 (Early Exposure) に対する学生の受けとめ方を知る目的で, 1995~1997年の3年間にわたり看護学科1年生計179名を対象にアンケート調査を行い, 回答率82.6%を得た。調査結果は以下のように要約できた。

- 1) 実習施設は3群 (重症心身障害者・慢性疾患, 知的障害者・自閉症および老人関連施設群) に大別されたが, 学生の分布は1施設あたり3.6人と均等な分布であった。
- 2) 90%以上の学生がEarly Exposureの目的にかなった実習であり, それ故によい体験であったと受けとめていた。
- 3) 記載されていたコメントを併せて考慮すると, 早期体験実習は, 入学動機や今後の進路を考え直すのによい機会になったものと考えられた。
- 4) しかしながら, 実習先への交通手段, 実習前の施設や基本的な介護技術に関する情報提供の点で改善の余地のあることが指摘された。

これらの結果から, 本実習は教育効果の面で充分機能しているものと考えられた。

キーワード

早期体験実習, 看護学科学生, 学生の反応, 教育効果

はじめに

富山医科薬科大学医学部看護学科 (以下本学科) における医学概論 (1997年度から医療概論に変更) は専門教育科目の中で1年次前期と最も早くから開講されている。また講義の一環として夏季休業を利用し4日にわたって学外の医療機関や福祉施設を使用し早期体験実習 (Early Exposure) を開設当初より行っている。この実習は専門教育が開始される前に, 心身障害者や高齢者等に接し, 介護等の体験を通じて入学動機の再確認, これからの4年間にわたる看護専門教育を受けるにあたり学習意欲の維持・向上および将来の医療人にふ

さわしい人格の養成と意識の確立に役立てることを目的としている。そのため実習は, 重症心身障害者・慢性疾患を対象としている国立療養所 (県外3施設および県内1施設), 知的障害者・自閉症関連施設および特別養護老人ホーム・老人病院・老人保健施設を中心とする老人関連施設といった多様な施設で行われている。

既に5回の実習が経験されたが, その都度レポートに基づく報告会の要旨や個人感想文を中心として記録集を発刊してきた¹⁻⁵⁾。またレポートと共にアンケートにより, 学生の本実習の受け止め方を答えてもらっている。丁度アンケートを開始して3年を経過したことから, 早期体験実習の実施

状況の把握および学生の反応をまとめるよい機会と考え、ここに調査結果を報告したい。

研究方法

1. 対象

1995年度、1996年度および1997年度に本学科に入学し、1年次で早期体験実習に参加した学生179名（女子学生175名、男子学生4名）を調査対象とした。

2. 調査方法

早期体験実習のガイダンスに際し（6月に開催）、自記式質問紙を配布し、回答は実習終了後10日以内に郵送または持参する方法により回収した。

設問は、実習の実施状況（図1. 設問A～E）と実習内容とその関連事項に対する学生の受け止め方（図2. 設問F～M）からなるが、回答以外に意見を自由に記してもらった。なお実習内容は施設により多少異なるが、食事・入浴・排泄に際しての介助・誘導が中心であり、それに清掃や入所者送迎等が加わっている。

質問紙の回収率は、1995年度81.4%、1996年度83.1%および1997年度は83.3%であり平均すると82.6%であった。無回答者数は毎年10名であった。

これらの学生は1～2施設に集中しており（1995年国立療養所1施設、1996・1997年老人施設各2施設）、その代表者に無回答の理由を問うたところ、特に本実習に対して懐疑・拒否的な理由はなく、レポート内容と重複することが主な理由であった。従って、以下の記載は無回答者の意見が本調査の結果・結論に影響を与えないことを前提にしている。

結果

1. 実習施設と学生の参加状況

入院・入所（一部は利用）対象者を指標にし実習施設を次の3群に分類した。

- ・A群：重症心身障害者・慢性疾患関連施設（県内外の国立療養所）
- ・B群：知的障害者・自閉症関連施設（S苑、M園およびY・Y園）
- ・C群：老人関連施設（特別養護老人ホーム・老人病院・老人保健施設）

上記の3群の異なる施設における実習参加学生数を表1に示した。3年間でのべ49施設で実習が行われたが、そのうちおよそ2/3にあたる31施設（63.3%）はC群であり、残りはA群が10施設

表1. 施設種別にみた実習参加学生の数

年 度	A群	B群	C群	合 計
	重症心身障害者・慢性疾患関連施設	知的障害者・自閉症関連施設	老人関連施設	
1995年	14 / 4* (3.5)	8 / 2 (4.0)	37 / 10 (3.7)	59 / 16 (3.7)
1996年	9 / 3 (3.0)	10 / 3 (3.3)	41 / 12 (3.4)	60 / 18 (3.3)
1997年	12 / 3 (4.0)	11 / 3 (3.7)	37 / 9 (4.1)	60 / 15 (4.0)
3年間 平均	35 / 10 (3.5)	29 / 8 (3.6)	115 / 31 (3.7)	179 / 49 (3.6)

* 実習参加学生数/施設数（下段括弧は1施設あたりの学生数）

およびB群が8施設であった。これら施設への学生の分布も、各群の施設数にほぼ比例しており、A群が35名、B群が29名およびC群が115名であった。その結果1施設あたりの学生数は3.5~3.7人(平均3.6人)と近接していた。

2. 早期体験実習の実施状況

実習の実施状況を早期体験実習のハードウェアとして捉え、選択理由・交通手段および宿泊実習の有無について調べた。また関連する問題として実習設定時期と日数に対する学生の反応を調査した(図1)。

設問Aの実習先を選択する時どのようにして選んだかでは、最も多かったのが「友人と相談して選んだ」で71名(48.2%)であった。次に「交通の便を考えた」もの32名(21.7%)、「得た情報」によるもの25名(17.1%)であった。その他の理由が19名(13.0%)いたが、記載されていたコメントをみると、その他の理由のほとんどがクラブ

活動の日程に帰因するものであった。但し、1学年について数名ではあるが、

- ・老人ホームより得るものが多いと感じた
 - ・普段接する機会のない自閉症の方々に接することの出来る好機会と考えた
 - ・先輩の記録集の感想に感動して選択した
- 等とはっきりとした選択理由を記した学生も認められた。

設問Bの実習往復時の交通の手段に関する質問には、半数以上の93名(63.3%)のものが自動車を利用したと答えていた。その内訳は、マイカーや友人の車利用47名(32.1%)と先輩や家族の車利用46名(31.2%)であった。公共の交通機関利用は約1/3の43名(29.4%)であり、自転車あるいはタクシー利用も11名(7.3%)とわずかではあるが認められた。

次に宿泊実習の有無については(設問C)、有と答えた例を施設数からみると、1995年度、1996年度および1997年度でそれぞれ5施設(31.2%)、7施設(38.9%)および5施設(33.3%)であり、3年間を通してみると、のべ17施設(34.7%)にのぼった。これを学生数からみると、1995年度、1996年度および1997年度でそれぞれ17名(28.8%)、23名(39.0%)および19名(31.2%)であり、3年間で計59名(33.2%)であった。

設問Dの実習の設定時期に関しては、1年次夏季休業という時期が適当と答えた学生は85名(57.7%)であった。また設問Eの4日間にわたる実習日数に関しては、111名(76.0%)の学生が適当と回答している。この質問に対して短かったと答えた学生が29名(24.3%)あったことが注目された。

3. 早期体験実習に対する学生の受け止め方

このことに関しては、上記参加学生の施設分布と実習の実施状況に関する設問に対照させ、いわば実習のソフトウェアとして捉え、図2に示した設問F~Mの7つで学生の受け止め方を問うた。これらの設問は、その意図するところが一部重複し明確には区分できないが、実習の目的にそって便宜上、1)入学動機の再確認(設問F・G)、2)学習意欲の維持・向上(設問H・J)、3)医療人としての意識の確立(設問K~M)の3つ

図1. 早期体験実習の実施状況に関する調査成績 (1995~1997年3年間の平均)

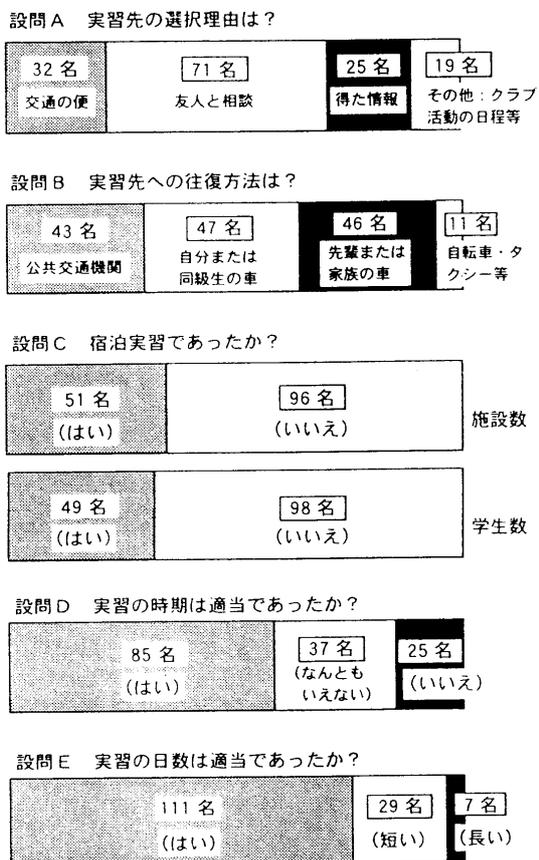
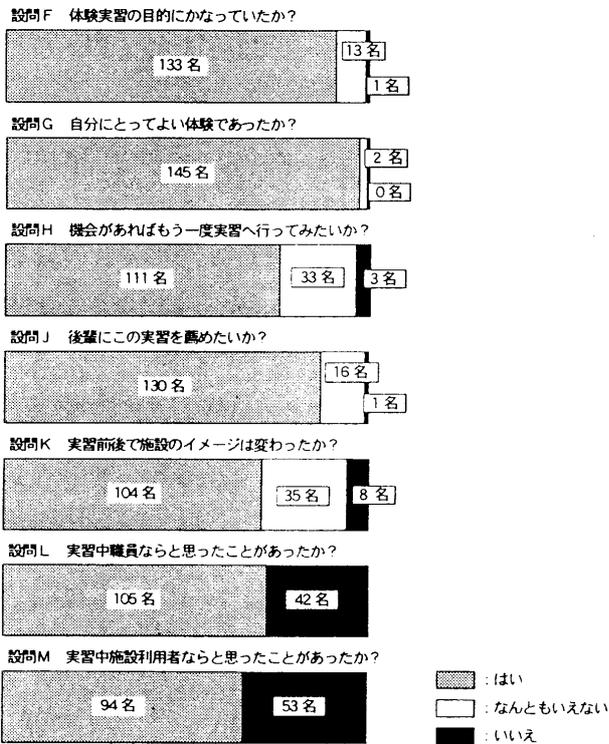


図2. 早期体験実習に対する学生の受け止め方に関する調査成績 (1995~1997年3年間の平均)



のカテゴリーに区分し検討した。

1) 入学動機の再確認

設問Fの「早期体験実習としての目的にかなっていたか」では、133名(90.7%)の学生が「かなっていた」と回答していた。但し、「なんとも云えない」と回答した学生を13名(8.6%)認めた。「かなっていない」と答えたものは3年間を通して1997年度の1名のみであった(しかし、この学生はその理由は記していなかったが、次の設問の「自分にとってよい体験だった」かでは、「よい体験だった」と回答していた)。

設問Gの「この実習は自分にとってよい体験だったか」をみると、否定した学生は3年間を通じて1人もなく、「なんとも云えない」と回答したものを2名(1.3%)認めたものの、それ以外の145名(98.7%)の学生は「よい体験をした」と回答していた。

両設問に関するコメントは「なんとも云えない」と回答した学生には見当たらず、肯定的な回答を寄せた学生に集中していた。代表的なものを列挙

すると、

- ・看護を志す者としての準備ができたような気がする
- ・1年次の早い時期に実習が行われたことで土台ができたと思う
- ・自分の入学動機や今後の進路を考え直すよい機会であった
- ・看護の知識を身に付ける前段階のこの素のままの時に、暗中模索で肌と肌、心と心で触れあえた意味は大きい。この体験は将来役に立つと自信をもって云える

等であった。

2) 学習意欲の向上・維持

設問Hの「機会があればもう一度実習へ行ってみたいか」では、「行きたい」と回答した学生が111名(75.7%)、「行きたくない」と回答した学生は3名(2.0%)であった。「もう一度行きたい」と答えた学生のコメントとして、

- ・自分の無知さを痛感したので、是非もう一度同じ施設に行っても吸収したい
- ・やり残してきたものがありもう一度行きたい
- ・今度は違った施設(病院や保健所)で実習してみたい

等が記載されていた。

設問Jの「後輩にこの実習を薦めたいか」については、「薦めたい」と回答した学生は130名(88.3%)、否定した学生が1名(0.7%)であった。数名の学生は、「絶対役立つのでは是非継続してやってもらいたい」、「絶対に行っても損はない。これからの人生そのものに役立つのでは是非薦めたい」等とコメントを記していた。A群の施設で実習をした1名の学生は、「得るものがあり後輩に薦めたいが、病棟の雰囲気等で耐え難い面もあり、事前に重症心身障害者や施設の情報を与えるべきだ」と記していた。

両設問に対して「何とも云えない」と答えた学生は前者33名(22.3%)、後者16名(11.0%)であり、1名から「後輩は、事前にビデオを見るとよい」との意見が寄せられた。「行きたくない」と回答した学生からのコメントは無かった。

3) 医療人としての意識の確立

設問Kの「実習先のイメージが実習前後で変わっ

たか」では、「変わった」と回答した学生が104名(70.7%)、「なんとも云えない」と回答した学生が35名(23.6%)、「変わらなかった」と回答した学生が8名(5.7%)であった。施設のイメージが実習前後で変わったと回答した学生の意見は、「施設の充実さ」「職員の多さ」「暗いから明るいへ」「偏見や差別意識が無くなった」「福祉施設の多様さを知った」等であった。「変わらなかった」と回答した学生はC群に限定されたが、家族に利用者があり事前情報が豊富であったことがその理由と記してあった。

「実習中に職員だったらと思ったか」(設問L)と「施設利用者だったらと思ったか」(設問M)では、自分をそれらの立場に置き換えて思ったことがあった学生が、前者で105名(71.3%)、後者が94名(63.7%)にのぼった。設問Lで「はい」と答えた学生のコメントは、

- ・あらゆる時自分を職員に置き換えていた
 - ・オムツ交換, 食事介助, 患者さんと話している時等ほとんどすべての時間に考えていた
 - ・自分には決して見せなかった嬉しそうな顔で職員と話しているのを見た時
 - ・自分は疲れ果てているのに, 寮母さんや職員の方々は, いつも楽しそうに仕事をしているのに気付いた時
 - ・夜中に徘徊しているお年寄りに, 寮母さんが怒りもせずなだめているのをみた時
- 等であった。同様に設問Mに関しては、
- ・「お母さんはいつ来る?」とたずねられ, どんな子も親を思う気持ちや自分の家に帰りたい気持ちは同じと感じた時
 - ・オムツ交換, ガラス張りのトイレ, 高い柵のベッドを見た時
 - ・食事介助の時, むせたりして辛そうな顔を見た時
 - ・食事後毎回多量の薬を服用しなければならないこと
 - ・自分が心身共に健康であることにとても感謝せずにはいられなかった

等であった。一方「なかった」と答えた学生の多くは「自分の事が精一杯で考える余裕がなかった」と記していた。

考 察

本学科早期体験実習は、医学科にならい1993年の開設と同時に実施してきた。施設も両学科で共有しているが、県内外のA～C群に分類した多様な施設で行われている。実習先の調整は全てクラス委員に一任してあったが、結果的には特定の施設に集中することなく1施設あたり3.6人に配分され均等な分布であった。選択理由において友人との相談が群を抜いて高かったことは、入学直後におけるクラスメイトとの交流の促進というプラス面を考慮しても、主体性の面でやや危惧を抱かせた。しかしながら、はっきりとした選択理由を記した学生も1学年について数名認めた。それらの学生はA・B群施設を選択した学生に限定されたが、今後こうした学生が少しでも多くでることに期待している。

実習先の選択問題に付随して、事前情報の重要性が指摘された。ガイダンスに際し施設情報として学生に提供してきたものは、各施設発行のパンフレット、既刊の体験実習の報告書¹⁻⁵⁾および特に印象の強かった感想文の紹介にとどまっておらず、この問題はガイダンスにあたり懸念していたことではあった。ビデオによる施設紹介も取り入れている東京医科歯科大学のアンケート結果によれば⁶⁾、「実習先に失礼にあたらぬ程度の事前知識でよい」との意見もある一方で、全体では40%の学生が情報不足と回答していた。今回の調査では15.7%が「得た情報」で実習先を選択した結果が得られたが、ビデオ紹介を希望した1名を除き、施設情報の過不足に関するコメントはなかった。学外施設での初めての实習であり、多少とも想像と現実の間のギャップを感じることは避けられないが、より多くの情報を持って実習に入れるためにも今後利用可能なビデオ等の導入も考えたい。また施設の情報以外に、実習効果への疑問と密接に関連する重要な意見として、「介護(おむつ交換や食事・入浴介助等)の基本的技術」の事前講習会の必要性を記した学生もあった。

宿泊については、いわば世俗から離れ実習に専念できること、また夜間・早朝における職員の仕事や施設利用者の様子等に触れることができ、そ

の分実習が奥深くなるものと考えられる。今回の調査では、施設数と参加学生数の面からも1/3相当が宿泊で行われているという結果が得られた。これは施設の協力を得てはじめてできることであり、高い数字であると受け止めている。大都市に在る東京医科歯科大学の例では、宿泊はかなり困難で当初から考慮されていず⁶⁾、富山という地理的条件がむしろ幸いしているものと考えられる。アンケートの結果や学生のコメントからみて宿泊の有無により実習の成果に差があったとは認め難かったが、数名の学生は次の機会があれば宿泊実習を体験したいと記していた。

通いの実習に関連して懸念される問題が交通手段である。幸いにして今までに実習往復時の交通事故は無いが、今回の調査で自分（あるいは同級生）の運転による者が約1/3を占めていることは実習を担当する者にとっては最大の心配事である。昨年秋の本学交通委員会の決定により、1年次は車による通学が出来なくなったが、是非この決定をこの実習へ拡大適用していただきたいと考えている。ちなみに、この実習の往復時の交通事故あるいは実習中の怪我等の事故に対して、入学時学生が加入する障害保険が適用になっていることを付記しておく。

今回の調査で最も回答が分かれ多様な意見を認めたのが、実習時期（1年次夏季休業）に関する設問であった。この設問で得た「適当」の回答率は、全設問中最も低かった。一方、「不適当」と回答した学生の意見は2つに分けられた。1つは夏季休業という時期そのものから派生する問題（クラブ活動の合宿や個人で計画した旅行等との重なり）と、もう1つは専門知識のない時点での実習効果への疑問であった。前者の問題に関しては、確かに医学科の早期体験実習はここ数年は夏季休業直前の補講期間に集中して行われており、本学科学生として不満も述べられていた。実習施設が両学科で共有されており、同じ日程で実習を行うことは物理的に出来ない。このことから、両学科が少なくとも隔年交替で補講期間に行えるように医学概論検討委員会に申し入れているところであり、今後この問題については完全ではないが解決方向があるものと考えている。後者の問題は

この実習の本質に関わるもので、早期体験実習の抱える不可避の矛盾点の鋭い指摘であることには相違ない。しかし、目的や意義に関して90%以上の学生が肯定的な回答を寄せていることから、一面では実習の意義をさらに飛躍させるための意欲の別の表現と取ることもできよう。このように考えれば、介護講習会等をガイダンスに取り入れる工夫により解決の糸口があるものと考えている。

実習期間については、医学科の経験から4日間（または3泊4日）が適当であるとの意見をいただき、それを踏襲することで出発した。当初は日数が長いのではないかと懸念があったことは事実である。しかしながら、今回の調査結果からはその懸念は払拭され、「長いと感じた」と回答したものの4.7%に比べ、むしろ「短く感じた」と回答した学生が24.3%に達したことには少し驚いている。「短く感じた」と回答した学生の提唱する延長期間として「せめて1～2週が必要」というコメントが代表的なものであった。日数不足が見学的要素の多い実習や過密スケジュールの原因ではないかと考える学生もあったようだ。一方、「適当な期間」と回答した学生が圧倒的に多く76.0%であり、実習の充実感と肉体的疲労との兼ね合いからも今回の期間設定は支持されているものと受け止めたい。

この体験実習は、「目的にかなっていたか」（設問F）および「自分にとってよい体験であったか」（設問G）の設問に対して、それぞれ90.7%および98.7%の学生が肯定的な回答を寄せた。これらの回答率は、肯定的な回答としては全設問中上位1・2位を占めていた。付記されていた意見からも本実習の目的が達成されたことが伺われたが、さらに「生命の大切さを考えるよい機会になった」あるいは「相手の視点にたつて考えることを学んだ」等のコメントは目的を超えた波及効果と受け取れるものであった。実習を終えて多くの学生がそれなりの意義を感じてくれた訳であるが、そのことは「機会があればもう一度実習へ行きたい」（設問H）や「後輩にこの実習を薦めたい」（設問J）に対する肯定的な回答率にも反映されていると考えられた。設問H・Jに対して「なんとも云えない」と回答した学生からのコメントは見当た

らず、残念ながらその真意が解らなかった。

設問Kの施設のイメージに関する回答結果と付記されていた意見をみると、施設に対する印象はいわばプラス面への変換と受け止められた。また、本実習は将来の医療従事者として密接に関連する多様な施設を知る好機会としても作用していたと考えられた。職員に対して(設問L)は、多くの学生が相手とのコミュニケーションの取り方の上手さや看護・介護技術の高さを目の当たりにして、称賛の眼差しで見ていることが伺えた。同時に、仕事の多さやきつさ(特におむつ交換や入浴介助)への同情もあった。この同情は、直接は記してなかったものの施設に関するマイナスイメージと表裏一体をなしているのかもしれない。施設利用者に対して(設問M)は、プライバシーの保持、医療・介護を受ける者の辛さ、あるいは親元を離れた生活の単調さへの同情に集約された。いづれにしても多くの学生が、職員や利用者の立場や心情に心寄せて実習が出来た結果が示されていると思われる。

併行して実習が行われている本学医学科においては学生の受け止め方はどうであろうか。松原らは、1年生のみならず上級生も対象に加え、1年次に体験したことが学年進行に伴いどのように変化するかをも含めて調査をしている^{7,8)}。これによれば、医学科生においても、学年進行に拘らず希薄化しない程の強いインパクトを受け、将来の個々の医師像の形成の一助になっていること、また学生達は実習に理解を示し賛成していることが明示されている。同時に施設入所者や職員に対する印象に関する回答も、今回の看護学科の調査結果と大きな違いはないと受け止めている。さらに松原らの実習とボランティア活動との関連性の調査結果によれば、90%以上の学生がこの実習がボランティア精神の育成に意義があったと答え、さらに半分以上の学生が実習を契機にボランティア活動をしたと回答している⁷⁾。今回の調査でこのことに関する設問は無く、ボランティア活動に直接触れた意見は見当たらなかった。しかし、報告書¹⁻⁵⁾にある感想文の中には、ボランティア活動として機会を見つけて施設に行きたい内容のものは散見され、実際本学ボランティア同好会の設

立に看護学科学生が多く参加していることも聞いている。こうしたことから実習が看護学科学生においてもボランティア精神の醸成に幾分なりとも貢献していると推定しているが、今後設問項目に加えて調査してゆきたいと考えている。これらの調査結果からも、両学科とも本実習が教育的効果を充分発揮しているものと考えられた。

おわりに

3年間にわたる早期体験実習直後のアンケート調査から、この実習を通じて得た様々な体験は、看護学科学生としての内面的充実というインパクトを与え、その目的がほとんど完全に達成されているものと考えられた。これらの受けとめ方は、今後の学習意欲の維持向上につながり、将来の医療人としての自覚を促し、後輩へと受け継がれていくものと期待したい。しかしながら、実習先への交通手段および実習前の施設や基本的介護技術に関する情報提供の点で改善の余地のあることが指摘された。今後も実習は継続して行われるべきと結論できるが、松原らの報告に習い、実習とその後展開される看護専門教育、臨床・地域実習への有機的結びつきを視点とした調査も必要であると思われる。

謝 辞

毎年の実習にご協力いただいています各施設・病院の方々、医学部担当教職員の方々に深謝致します。

文 献

- 1) 落合宏編：平成5年度医学概論および体験実習記録集，富山医科薬科大学医学部看護学科，富山，1993。
- 2) 落合宏編：平成6年度医学概論および体験実習記録集，富山医科薬科大学医学部看護学科，富山，1994。
- 3) 落合宏編：平成7年度医学概論および体験実習記録集，富山医科薬科大学医学部看護学科，富山，1995。
- 4) 落合宏編：平成8年度医学概論および体験実習記録集，富山医科薬科大学医学部看護学科，

- 富山, 1996.
- 5) 落合宏, 塚田トキエ編:平成9年度医療概論
および体験実習記録集, 富山医科薬科大学医学
部看護学科, 富山, 1997.
- 6) 村松敏夫編:人間科学教育課程「試行」報告,
140-147, 東京医科歯科大学, 東京, 1995.
- 7) 松原 勇, 鏡森定信, 成瀬優知, 太谷英行:
福祉体験実習が医学生に及ぼした効果. 医学教
育, 22:3-8, 1991.
- 8) 松原 勇, 鏡森定信, 成瀬優知, 太谷英行:
新入医学生と上級医学生の福祉と健康に対する
態度に関する比較調査. 医学教育, 22:67-70,
1991.

Responses of the students to Early Exposure (a primary four-day practice) in School of Nursing, Toyama Medical and Pharmaceutial University

Tokie Tsukada, Miho Umatake and Hiroshi Ochiai

School of Nursing, Toymama Medical and Pharmaceutial University

Abstract

The first-year students in School of Nursing, Toyama Medical and Pharmaceutial University, have experienced a primary four-day practice, referred to as Early Exposure, at various facilities and hospitals during the first summer vacation. From 1995 to 1997, self-administrated questionnaires were sent to the students (a total of 179 students) to know their responses to Early Exposure, and 147 students (82.6%) responded to the questionnaires. The main findings are summarized as follows.

1) Although three kinds of facilities (hospitals for physically and mentally handicapped persons including chronic diseases, facilities for mentally handicapped persons including autism, and homes for the aged) were used for the practice, the students distributed to these facilities at almost equal proportion (3.6 students per facility).

2) More than 90 % of students answered that this Early Exposure matched its purpose and thereby satisfied with the practice.

3) Taken together these positive responses with their comments, Early Exposure could be considered to provide an opportunity inducing a better insight into each motive for selection of nursing school and each future as a medical professional.

4) However, several issues underlying onto the practice were pointed out in the transport means in both ways of the practice, and advanced information for the facilities and fundamental supporting-skills to improve the practice more meaningful.

In light of these findings, it has been strongly suggested that Early Exposure is sufficiently functional from the aspects of educational effect.

Key words

early exposure, students of nursing school, responses of students, educational effect